
 学 会 記 事

第49回膠原病研究会

日 時 平成2年11月20日(火)
午後6時20分
会 場 有壬記念館

I. 一般演題

1) RA 滑膜へのアミロイド沈着について

高橋知香子・村澤 章(県立瀬波リウマチ)
中園 清・田中 隆明(センター整形外科)

RA にみられる重篤な合併症の一つに、多臓器へのアミロイド沈着があるが、その中で、関節滑膜へのアミロイド沈着を検索し、関節破壊や、全身性アミロイドーシスとの関連などについて検討した。症例は、classical RA 21例(女17, 男4), 平均罹病期間11.6年, 全例, 金剤などの second line drugs を使用していた。Congo red 染色で、9/21例の滑膜間質に陽性像を認め、透過電顕でもアミロイド線維の蓄積を確認した。骨破壊の強い症例に、比較的高率に、アミロイド陽性例がみられ、RA 因子も、陽性例で高い傾向がみられた。年齢、罹病期間、CRP、免疫グロブリン値は、陽性群、陰性群とで有意差はみられなかった。7/21例で、胃粘膜も同時にアミロイド検索を行ったが、滑膜所見と必ずしも一致しなかった。今後さらに、全身と関節局所のアミロイド沈着との関係、および、免疫組織学的染色によるアミロイド蛋白の同定について検索したい。

2) 気管支肺胞洗浄にて多数の形質細胞を認めた MCTD・シェーグレン症候群の1例

武田 康久・平原 克己
本間 智子・菊池 正俊
佐藤健比呂・篠川真由美
鈴木 栄一・中野 正明
来生 哲・荒川 正昭(新潟大学第二内科)

気管支肺胞洗浄(BAL)液中に、多数の形質細胞を認めた、MCTD・シェーグレン症候群の1例を報告する。

【症例】59歳、女性。昭和48年からレイノー現象、53年から多発関節炎が出現し、57年にシェーグレン症候群と診断された。平成2年7月から、乾性咳嗽、発熱が出現し、某院に入院した。9月から、呼吸困難も出現し、著しい低酸素血症を呈したため、当科に転院した。RA、PSS、SLE、MCTD、シェーグレン症候群の診断基準を満たし、CPKも上昇していた。また、胸部レ線ならびにCTで、びまん性の斑状影を認め、BALでは、細胞数、リンパ球ならびに、著しい形質細胞の増加を認めた。経気管支肺生検でも、リンパ球・形質細胞の浸潤を認めたが、浸潤細胞に、monoclonalityはなく、lymphocytic interstitial pneumonia(LIP)と診断した。

【考案】MCTDとLIPの報告例はなく、本例は、極めて稀と考えられるが、合併したシェーグレン症候群による肺病変の可能性も考えられた。

II. 特別講演

慢性関節リウマチの薬物療法

—現状と将来—

東京女子医科大学リウマチ痛風センター所長

柏崎 禎夫 教授

第50回膠原病研究会

日 時 平成3年6月26日(水)
午後6時
会 場 有壬記念館

特別講演

1) 抗リウマチ剤の作用機序と治療への応用

神戸大学整形外科

松原 司 先生

2) 膠原病診療30余年の変遷

新潟大学第二内科教授

荒川 正昭 先生